

原爆は絶対作ってはなりません

宮井マサコ（当時16歳）
美瑛町



あれから70年の月日が流れます。

1945年8月6日の事は昨日の事のように鮮明によみがえります。私は16歳、爆心地から3.3km離れた庚午北町というところにいました。あの日は良く晴れた朝、近所の人と軒下で立ち話をしていました。その朝出された空襲警報が解除になりホッとしている時、急に青白い光がまたたき、その瞬間体を包み込むような赤い炎が、払いのけ様とする間もなくウワーと来ました。こんな所にまで、と私たちは口々にわめきながら夢中で家の中に駆け込みましたが、下敷きになると思いました外へ飛び出しました。ほんの一瞬の間でした。気付いて見ると家はすさまじいばかりの壊れ様で、天井、屋根とも吹き飛び、壁は抜け、ガラス窓は枠ごと吹き飛び、倒れた柱やタンスにはガラスの破片が突き刺さり、ものすごい破壊力を見せつけていました。幸い姉も私も不思議なくらい怪我もせず助かりました。

どの位たったのでしょうか、急に空が暗くなり黒い大きな油の様な雨が降ってきました。町内の人々は口々に、油をまいて焼け野原にするつもりだと叫び、大騒ぎになりました。あの時はラジオも鳴らず情報がなくて不安が一杯でした。

やがて次から次へと避難してくる人たちがこちらに向かってきます。まるで幽霊の様でした。灰をかぶった髪は逆立ち、顔や手足はひどく火傷し、前に出している手の先には火傷ではがれた皮膚がぶら下がっています。血だらけの足を引きずりやっと歩いてきます……。

今でも忘れられない事があります。その日市内の立ち退き疎開にあっていた中学生が、丁度作業を始めたばかりの時に原爆が落ちたのです。その中の一人が助けを求めて必死に走って飛び込んできました。その中

学生は、上半身裸で、学生帽の下から体全体がひどい火傷を負って、額の皮膚が眉毛のところでぶら下がり、顔は赤黒くはれあがり、「熱いよ、熱いよ、助けて、助けて」と叫ぶのです。ためてあった水道水を何回かけてあげても一時的な気休めです。薬もありません。私は姉の標準服を着せて、この先に救護所があるからそこへ行ったら、と言いました。地べたに転がって苦しむ姿を見るに耐えられませんでした。何とむごいことなのでしょう。被爆という運命に出くわした中学生でした。住所名前を聞いたのですが何か紙にでもメモしておけばよかったと思います。8月6日には一番先に思い出します。

夕方になるとあちこち避難していた人や朝勤めに出た人が自分の家の所にもどってきました。病院に通っていたおばあちゃんが帰らないということで、町内や身内の人々が探し歩きました。脇の下に残っていたわずかな布切れでようやく見つけ出したのですが、そのおばあちゃんも二日目には亡くなりました。爆心地に家族を探しに行った人も、その後熱が出たり髪の毛が抜けたり、体調が悪くなって亡くなった方も大勢いました。原爆の恐ろしさは言葉に尽せません。二度とあってはならないことです。

その年の10月、豪州兵が上陸するので田舎のある人は避難する様にと連絡があり、私たちは荷物をまとめて芸備線の向原の伯母の家に行くことにしました。朝早く町内の方と別れ、姉と二人で広島市内に入りましたが、原爆が落ちてから初めて見る広島は見渡す限りの焼け野原です。中国新聞社、福屋のデパートなどの大きなビルも焼け焦げて無惨な姿をさらしています。大きな木もあったのですが、それも見当たりません。赤く錆びついた線路にはただ焼け焦げた電車があるだけ、通いなれた相生橋や原爆ドームを見て、ただ茫然と立ちすくむしかありませんでした。原爆投下から何日も何日も赤い炎に包まれ、多くの人々が助けを求めて苦しんで亡くなった町をしっかりと見ておかなければと、重い足取りで歩いたことを思い出します。

その上大型台風が通過した後でしたので、田舎の伯母の所へ行くにも線路は不通の所がたくさんあり、夜遅くにやっと着きました。私は着くなり倒れ込んでしまいました。そして何日も熱が続き、歯茎からは出血

し、食べた物が消化されず下痢をしてしまいます。少しよくなってもまた出血を繰り返し、身体はいつもだるいのです。洋裁学校に行っても1日行ったら疲れて次の日は休む、という状態でした。そうしたことが数年間続きました。あのときのことを思えばよくこの年まで生きられたものだと思います。

今年は終戦70年の節目にあたります。言い尽くせないつらいこともたくさんありましたが、平和、平和は素晴らしい。何ものにも変えられません。原爆は絶対作ってはなりません。原発も後始末のできないものは絶対やめるべきです。私は強く反対します。



被爆を世界に伝えて

姉妹が見たヒロシマ

①

手記集の題名は「Voice from Hiroshima」から。手記をつづ

akusha 被爆者協議会(超智助千景、札幌)が連年の被爆から体験をメッセジ書き、ボン

デブが英訳して作製。今年4月5日に米ニューヨークで開かれた核拡散防止条約(NPT)再検討会議の

会場で、被爆者ら各団の出席者に配った。手記を寄せたのは各地の1人、その中に一組の姉妹がいる。

当時、姉妹本当に勇ましました。私はまだ学生

戦後70年
その記憶



上川管内美瑛町の自宅で語り始めた。
次々と肉親世界
被爆したのは広島。姉の
高藤シツ子さん(92)深川
市在住。は22歳。マサコ

んは16歳だった。
生まれ育った美瑛を家族
と共に離れ、両親の故郷の
富野町に入籍。その後、
広島へ移ったのは1943
年(昭和18年)。2年後の
8月6日、姉妹が人きり
なっていた。

父彌川佐市さん、母シツ
くさんは広島で結婚し、大
正の初めごろ、上川管内上
富野町に入籍。その後、
美瑛町に生鮮食品の店を
出した。町内には日本陸
軍第1師団の演習場と宿泊

用の廠舎があり、商売は
繁盛。裕福暮らしだった。
しかし、戦況が悪化。従
業員が出征し、頼りの長男
晋さんは肺核を患った。

「気候の良いところで療養
させた」と、佐市さんは
思い切った店閉め。43年
うまご半年後に病気で亡
くなった。
この時期、シツ子さんは
結婚する。相手は、長野の
農家の長男で、当時中国で
憲兵隊にいた。既に

女子(母)に在学していたマ
サコさんは、学務員で市
内の軍車庫に預け、魚雷
の部品取りに従事した。
「星夜交代制で夜勤も
あった。部品を必ずで磨
いたり、穴を開けたり、工
員さんと同じ仕事をした。
学校には1カ月ほど1回くら
いしか行けませんでした。
そのうち体調を崩し、休学
した。

失意の中あの日迎えた



①1932年(昭和7年)、上川管内美瑛町での家族写真。右から、次女高藤シツ子さん、三女宮井マサコさん、母シツ子さん(故人)、長男晋さん(同)、長女トシエさん(同)＝宮井さん提供②③広島での辛かった日々を振り返る宮井マサコさん

軍隊を病気で亡くして
涙もれ果てたとき、原爆
が落ちた。あの日は、
頭から離れませんでした。マサ
コさんは振り返る。

晋さんは市内の病院へ入
院したが、2カ月後に亡
くなった。お百度りをし、
塚で土葬された。本人と告わ
ないままの「早急結婚」だ
った。広島で、夫の実家の
長男を復讐しながら父母を
看病し、亡くなった後は、
マサコさん一人きりにさ
せまいと、広島で一緒に暮
らした。近くの店洋裁を
習い、家で洋服の仕立ての
仕事に精を出した。

軍需工場に従事
進徳高等女学校に現進徳
回遊(載します)。

広島への原爆投下から70
年、悲惨な体験世界に宛
信し、核廃絶の決意に
い。その願い、姉妹はベ
ンを手に手記をつづった。
被爆し、戦後を生き抜いた
2人の物語を伝える。
(大畑明水が担当) 3

「星夜交代制で夜勤も
あった。部品を必ずで磨
いたり、穴を開けたり、工
員さんと同じ仕事をした。
学校には1カ月ほど1回くら
いしか行けませんでした。
そのうち体調を崩し、休学
した。

『北海道新聞(空知版)』二〇一五年八月二五日付

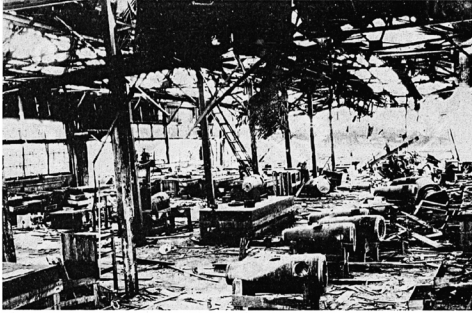
被爆を世界に伝えて

姉妹が見たヒロシマ

1945年 昭和20年
8月10日。広島市は、朝から暑気が広がっていた。
洋服の仕立ての仕事をして
いた斎藤シズさん(82)
川市在住。当時22歳。と、
体調を崩して高等姪姪
校を休んで、妹の婿方マ
サコさん(86)川管内美
瑛町在住。同16歳。ともに
旧雄川川は、広島市内の
旧雄川川は、広島市内の
旧雄川川は、広島市内の
旧雄川川は、広島市内の

戦後70年 そちらの記憶

原爆が投下されたこの日の状況を、今年、米ニューヨークで開かれた核拡散防止条約再検討会議で配布された本人の手記と証言ビデオを元に振り返った。
後に「爆心地」と判明する中心部から、西に移動する



性や苦話をしていた。「いつ死ぬかからないし、配給品も度、食事会でもしませんか」そんなやり取りをし、ふと空を見ると、1機の飛行機が上空を旋回していた。

午前8時15分。急に青白い光が来たときその瞬間、体を包み込むような赤い炎が払いのけまじとする間もなく、ウワーと来たのをマサコさんは見た。

「何だろう」「焼夷弾かもしれないよ。2人で声を掛け合っ、空に逃げ込もうとした時、爆風が襲い

かかった。かみか真ん中に折れ、壁がけ落ち、天井が飛ばされ、家財道具などが頭上には降りこぎた。「伏せて、伏せてない」爆風が取まった。幸いけがはない。手をなき道路に出た。夜のまに暗く、ぼんぼんと立ちすくんだ。少し明るくなり、周囲を見渡すと、田んぼに転がっている人や血を流して倒れている人がいた。トビも空

その瞬間 光と炎、爆風



①宮井マサコさんが終戦前まで働いていたと記憶する「東洋製罐広島工場」。当時重労働の指定を受けていた。写真は1945年11月ごろ。(米国立公文書館所蔵、広島平和記念資料館提供) ②「けががなく生きてこられたのは軒下」のいたから。ひさしが「原爆の熱線」を避けてくれた」と話す斎藤シズ子さん

から落ちて死んでいった。その家の扉が燃えていた。シズさんはバケツを持って走った。しばらくして自宅の前に戻ると、マサコさんが面影の位牌を手

に泣いていた。家の中から取ってきたという。「同じなの。そんなことが逆立ち灰をかぶったように。顔は真っ黒、焼けた皮膚が、黒い先からぶら下がる。中々と見られる男の子は体全にはやけど

を負い、「熱いよ、痛いよ、助けて、助けて」と血で地面を駆け回った。2人は水道の水を男の子の体にかけた。上着を替えて「救護所で治療」と送り出した。自宅は足の踏み場もなくな。無数のガラスの破片もな。柱やタンス、鏡に突き刺さっていた。中々いたらと思っ、身の毛がたつた。

外にかやをつり、布団を敷いて夜を明かした。北海道で再出発

8月15日。町内長宅で終戦を伝える天降下りの玉音放送を聞いた。

「二人間にみじめになつた広島、もう少し早くそのお言葉を聞きたかった。」シズコさんは別の手記に、こう書いている。

10月、2人は焼野原の広島市内を離れ、同県内の親戚の家へ移った。

マサコさんは不食が続いた。「食欲がなく、食べたらずりしてしま。それから何年も続いた。体調が良くないと思っ、少し無理したらだめでした」

2人は北海道の再出発を決意。生きろために必死で働いた。「広島で両親と死別し、爆撃も物もなくなつたけど、気が持たない。強かったマサコさんは、柱やタンス、鏡に突き刺さっていた。中々いたらと思っ、身の毛がたつた。

『北海道新聞(空知版)』二〇一五年八月二六日付

被爆を世界に伝えて

姉妹が見た「ヒロシマ」

1945年 昭和20年
8月に広島で被爆した齋藤シズ子さん(82) 深川市在
伴、宮井マコさん(86)
川管内箕野町在住。姉妹に
つての戦後は被爆に伴い
伴侶失脚不良の不安や
「戦い」でもあった。

て野良仕事に出され、戸惑
いの連だった。
忍さんは大層警護する
近衛兵で、その後、憲兵と
して中国に渡り戦後は職
犯となり香港の刑務所に
た。と話していた。その影
響が、マコに勤めても給

戦後70年 そらの記憶

①1978年 昭和53年、広島市内を歩いた齋藤さん(右)、宮井さん。このとき入国して、被爆者手帳を申請した。下道内在住の被爆者入国の手記を英語に翻訳した冊子。齋藤シズ子さん、宮井マコさん姉妹も手記を寄せて、海外に発信された。



② 辞めさせられる。3、4回仕事を変わった。シズ子さん。とうとう、心の支えは仕事

50年 昭和25年)ころ、シズさんは北海道での再出発を決め、親戚を頼り、忍さん(深川)来た。

最初の商売は露店だった。一怒りでオモチャを売

寝て、飯(こう)で飯を炊いて食べました。51年(同26年)に「齋藤商店」を開店し、鮮魚などを売った。店繁盛する。出した。店繁盛する。子(63)深川は「母は驚愕まよった働いた。失敗してもよまじない。原爆を生き延び、それに比べてはじめてこないと思

は妻会場のある、日の出会館を新築、社員として事業発展を走り続けた。でも、シズさんは「被爆を」にできなかった。広島での体験は家族以外には話さず、シズさんの経歴を

くなを思った。マコさんも仕事を心の支えにした。かつて家族で住んだ箕野町で「美瑛ドレ」スノーカー女学院を設立。被爆後、下南などに悩まされただけに、いつ奥谷が興々なるか心懸った。ど、忙しかったのが良かった。休まずに何とかなった。と話す。

マコさんは被爆体験を周りに手にして残した。しかし、「今は体が良くなったからいいじゃないか」と、覚めた反応に戸惑うことも多かった。

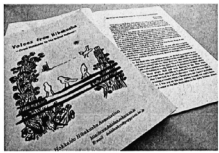
それどころか、時に共に、広島での体験を後世に伝えようと行動始めた。高校卒業相手に話したり、2008年には、旭川の団体の聞き取りに応じ、朗読劇上演もされた。

き込まれ、一晩で翻訳した。被爆者が言い残したいことを記録し、広げて行きたい」と語る。

米国内でも反響

局で働く佐々木さんの友人は、手記の感想局のプロに響く。しかし、生存者があふれてくると、アメリカ人はの事業を考えようとする。プロの記事を読むと、アメリカ人がやっていたことを記憶にとめておくことができる」と書いた。

生き延びた体験 後世に



そして今年、米「ユニヨーク」で核拡散防止条約再検討論で配布された手記は、高齢のためこれが最後(マコさん)との思いを込め、8月1日の出来事をそれぞれ書いた。シズさんの手記をボランティアで英訳した十勝管内上士郎講師の佐々木あすさん(54)は、文章に引

『北海道新聞(空知版)』二〇一五年八月二七日付